

『日本中世に何が起きたか 都市と宗教と「資本主義」』

網野善彦 KADOKAWA／角川文庫

本 館

請求記号：X/080/Ka14/Ami

資料ID：701884231

洋泉社／MC新書

神田分館

請求記号：/210.4/A45

資料ID：701000762

経営学部教授 佐々木 浩二

私が専攻する経済学は「横書きの英文を縦書きの日本語にする」と言われる輸入学問です。学びを深めるほどに、つくづく「これは数百年前のヨーロッパに生きた人たちの見方、考え方であり、日本とは何か違うな」と感じます。高名な歴史学者による本書は「では、日本の言葉で経済を語るとどうなるのだろうか？」という疑問に答えてくれます。

自分の持ち物を相手の持ち物と交換するとき（売買するとき）、私のモノがあなたのモノになってしまうという執着にとらわれがちです。中世においては、この執着を断ち切るために「私のモノ」を神仏に捧げてから「あなたのモノ」にしました。古くから門前や神前に市（いち）が立ったのは、神仏に捧げることで所有が縁切りされた、ある種の神聖な供物を受け取る場としてふさわしかったからのようです。

市のように、日常につながる非日常を庭といいます。網野氏が注目する庭には、秩序から解き放たれた自由の民が息づき、ときに商いをし、往来をし、訴えをし、踊り、歌い、祈り、豊かな文化が紡ぎ出されてきました。商人、供御人、神人、寄人、山伏、巫女、白拍子など聖俗一如の異形が集う夢世界、中世をこんなふうに捉えたところが独創的です。

本書から、牧歌的な助け合いの場である農村に、得体の知れぬ妖力が浸透してくる中世の緊張感が伝わってきます。異質なものをいかに受容し、社会に位置付けるかというのは、時代を問わず大きな問題のようです。

※「異形」については網野氏の『異形の王権』を参照。なお、私は網野氏の皇室批判やマルクス主義的な部分には賛同していません。また、とてもディープな箇所もあります。ある種解毒して読みこなす力量が求められる歴史家であることを付言しておきます。